小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組みのデザイン−「Facebook コミュニティ愛川町が好きな人」を事例として−

Community Design and Development to Accelerate the Cooperation between the Residents and the Small Activity Organization: A Case Study of Facebook Community “The People Who Love Aikawa Town”

福本　塁
FUKUMOTO Rui

キーワード：協働、コミュニティデザイン、コミュニティディベロップメント、小規模団体、愛川町
Keywords：Cooperation, Community design, Community development, Small activity organization, Aikawa town

The purpose of this paper is to design an opportunity to accelerate cooperation among the small activity organizations and the local residents in Aikawa Town, Kanagawa Prefecture, and to identify the process, effects, and challenges of the design and implementation.

１．はじめに

地域の問題解決には「人と人のつながり」が重要な役割を果たす。しかし、近年、地方都市においては人口減少及び少子高齢化の進展、並びに都市への人口流出が顕著であり、「つながりの数の減少」と「つながりの質の希薄化」が地域の問題解決を阻害する要因の一つとなっている。地域の問題を解決しようと、或いは課題を達成しようと地域住民や有志者によって様々な取組みが行われているが、運営主体となる活動団体における構成員の固定化・高齢化により活動の停滞・離脱者の増加が発生し、長期的な活動の継続性が乏しい状況が生じる。当然、活動団体の構成員もこれらの状況を認識し、新規構成員や新規参加者を動員させることを狙いとした取組みを実施する。しかし、これらの取組みが実施される際には「福祉推進団体なら福祉イベント」、「防災教育推進団体なら防災イベント」と銘打って実施され訴求対象に変化がなく構成員及び参加者の固定化が生じやすく、関係者の多様性が失われ、活動の形骸化を引き起こす要因となる。例えば、筆者がこれまでに展開してきたトランプを用いた防災コミュニケーションを促す取り組み[1]では、主催するイベントにはもともと防災に対し興味・関心の高い層が集まる形式で場が成立しやすく、本質的な訴求対象であるはずの「防災に対する興味・関心の低い層（例：地域交流が希薄な 20 代～ 40 代の男性）」や「特別なニーズを有する住民」等の参加機会が乏しい状況が見られる。本来、構成員および参加者の固定化は望ましい状況ではなく、様々な世代構成およびニーズを有する多様な住民・有志者の参加を促進することが望ましい。一方で活動そのものが衰退している小規模な活動団体が上述したような新規参加者を動員する活動を負担するには、知識・技術・労力・費用面からも困難である。では、小規模な活動団体が様々な世代構成およびニーズを有する多様な住民・有志者の参加を促進するにはどうすればよいのだろうか？筆者はこの問題に対して「小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組み」をデザインすることで問題解決への一歩が踏み出せるのではないかと考えた。

そこで、本研究は神奈川県愛甲郡愛川町を事例に小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組みをデザインし、その実践過程と効果および課題を明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

２－１．協働を加速させる場・仕組みのデザインと実践

（1）場・仕組みの要件定義

小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組みのデザインに必要な課題は①小規模な活動団体を集めること、②不特定多数の地域住民を集めること、③集めた人々の交流を促すこと、④交流がその後の活動に還元されることの４点であると考えた。

（2）実践対象：愛川町が好きな人

これらの課題を達成する場・仕組みをデザインするための実践対象として筆者が管理人を務める Facebook コミュニティ「愛川町が好きな人」[2]を選定した。同コミュニティは 2013 年９月に設立され、2017 年７月時点で会員数 848 名、2018 年３月時点で 923 名、2020 年９月時点で 1,078 名の規模（愛川町の人口規模 40,119 人に対し約 2.7% に相当）で運営される「愛川の今を情報として共有し、愛川町が好きな人たちが集いゆるくつながること」を目的としている。課題①および課題②については同コミュニティを軸に参加を促す声がけを実施した。

（3）交流を促す場：愛川町が好きな人シンポジウム

課題③については 2017 年 10 月 14 日 13 時から 16 時に春日台児童館にて「愛川町が好きな人シンポジウム」を開催した。出展者が決定したのちに、Facebook、近隣町内会回覧板、協力者によるチラシ設置等による認知を図った。

（4）交流を促す仕組み：愛川町が好きな人マップ

出展者･来場者を含む参加者の交流を促す仕組みとして、「各出展内容の体験」だけでなく、愛川町の地図を用いて「まちの好きな場所に関する意見抽出」を実施した。

２－２．交流の効果に関する調査

交流の効果には、当日の効果（アンケート調査）としての「訪問意思」「交流意思」と後日の効果（インタビュー調査）

図１　愛川町が好きな人シンポジウム開催の様子①

図２　愛川町が好きな人シンポジウム開催の様子②

図３　愛川町が好きな人シンポジウム開催の様子③

としての「訪問行動」「交流行動」を位置づけ各調査を実施した。

２－３．協働を加速させる場・仕組みの考察

得られた調査結果に基づき、小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組みの実装条件及び実施効果として「様々な世代構成およびニーズを有する多様な住民・有志者の参加の促進」の効果を検証し、協働を加速させる要因と手法について考察する。

３．結果

３－１．出展者数および参加者数

「課題①小規模な活動団体を集めること」及び「②不特定多数の地域住民を集めること」に対する取り組みとして、「愛川町が好きな人シンポジウム」を開催した結果、計16の個人･団体が出展者（うち､小規模団体12団体･個人１名）と116名の来場者数を得た。出展内容の詳細を表１に示す。シンポジウム開催の様子を図１～図３に示す。

表１　出展者の概要

ID	団体名	規模	出展内容
1	愛川園芸	小規模	花・ハーブの苗・寄植え販売等
2	愛川町環境課	小規模（自治体）	キエーロ導入のためのPR
3	愛川町美化プラント	中規模（自治体）	みんなのメダルプロジェクト
4	都市環境サービス	中規模	CD・DVD・ゲームソフトの資源回収
5	スイートフレーバー	小規模	菓子パンの販売
6	NPO法人あいかわ工房	小規模	缶バッジ・石鹸の販売
7	春日台タウンカフェあい	小規模	飲料の販売
8	愛川町広報シティセールス班	小規模（自治体）	愛川ブランド等のPR
9	ありんこ作業所	小規模	自主制作品の販売
10	CAFÉ ジョワ	小規模	パン・カレー・ケーキの販売
11	Deli's	小規模	菓子・飲料の販売
12	富成石材	小規模	石材を使ったワークショップ・相談
13	ひだまり	小規模	つまみ細工ワークショップ・アクセサリ・ストラップの販売
14	小学生３年生	個人	自由研究の発表
15	神奈川わかものシンクタンク	大規模	資源循環型まちづくり事業モデルの展示
16	NPO法人ここのわ	小規模	事業所の紹介展示

３－２．交流を促す「まちの好きな場所」の意見抽出結果

会場メインエントランスに「愛川町が好きな人マップ[*1]」と題したA0サイズの愛川町全域を含む地図（陰影地形図）と制作方法を伝える説明員を配置した（図４）。説明員は「愛川町の好きな場所を教えて下さい」と来場者に声をかけ、来場者が「地図を眺める」ことを促した。興味を持った来場者は「愛川町の好きな場所の名前と理由を３㎝四方の『マップピン』に記入」し（図５）、地図上の位置を示す場所にマークする（図６）工程で意見を示し、他のマップピンを見比べる手続きでマップの制作に参加した。住民同士の対話において「能動的な主体性」[2)]を発現させるため、これらの手続きには「○○の話をしましょう。」「○○は知っていますか？」といった「話を促すガイドや説明」は説明員より一切実施しないように配慮した。来場者によ

り制作されたマップを図７に示す。この作業を通じて得られたマップピンは164個であった。その記載内容の一部を表２に、マップを通じた語りや情報共有で見られた対話の一部を表３に示した。

図４　地図とマップピンを用いた話合いの場

図５　マップピンに場所の名前と理由を記入している様子

図６　記入したマップピンを地図にマークしている様子

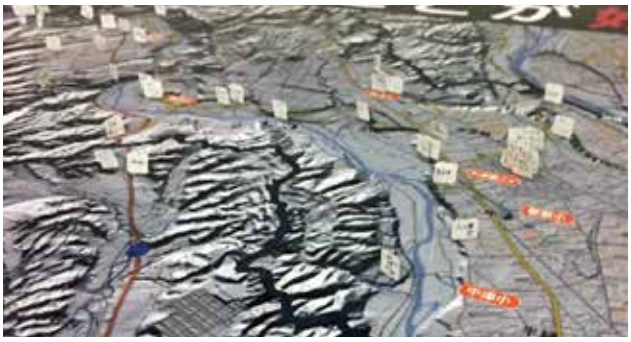

図７　来場者によりつくられた愛川町のここが好きマップ

表２　マークされた場所の例

好きな場所	その場所を好きな理由
仏果山	ゆっくり登って、頂上で美味しい珈琲を飲めるから。
内陸工業団地	イチョウ並木がきれいで、銀杏を拾えて秋らしくて良い光景。
半原愛川園芸	松ぼっくりガーランドづくり楽しかった。
中津ぶーコッコ	おいしくて、いつも特売やっている。
半原 café 豊作	ヘルシーランチがたまらん。
三増合戦まつり	初参戦で楽しかった！
中津第二小学校	子どもたちが運動会に一生懸命頑張っている姿を見られる。
春日台地区	大きな公園が６つあり、住みやすいです。
三増合戦場跡	このあたりから見える、仏果山などのやまなみはとても雄大で、通るたびに癒やされています。
馬渡橋近くの中津川	夏に泳ぎに行くのにとてもいい場所です。小さい頃、ゴムボートで引っ張ってもらい、川の魚を眺めるのが好きでした。秋になると、川沿いの木々の紅葉も綺麗で、私にとって大好きな場所です。
半原のそば処満留賀	「そば食べにいくかー」と祖父が笑顔で連れて行ってくれたのを思い出します。
愛川東中学校のグランド	愛甲厚木地区で、一番大きいグランドなのです!! 大山も望めます。
水道坂からの街道の眺め	田んぼの美しさ。春のみどりから秋の黄金色。遠くに仏果山と宮ヶ瀬ダム。ジェットコースターに乗っているような気分。
桜台 TIKI	初めてペルー料理を食べたのがここです。豆料理大好きになった。

表３　対話例

発言者	発言内容
来場者 A	「やっぱり宮ケ瀬と服部牧場は人気があるなぁ。」
来場者 B	「これって有名じゃないところでも書いていいのかな？」
説明員	「はい。大丈夫です。地図上での場所はわかりそうですか？」
来場者 B	「わかるよ。ばっちり。もうね。通勤で毎日のように通るのだけど、一年通じてこの場所はよく顔（景色）が変わっておもしろいんだよね。」
来場者 A	「へぇー。そんなところあるんだ。あ、ここって坂の上から川と山が一望できるところだよね。自分も知ってました（笑）。」
来場者 C	「そんなところあるのね。私長く住んでいるけど知らなかったわ。散歩してみようかしら。」
来場者 B	「おすすめですよ。ほんと、いいとこなんです。」

図８　アンケート調査の様子

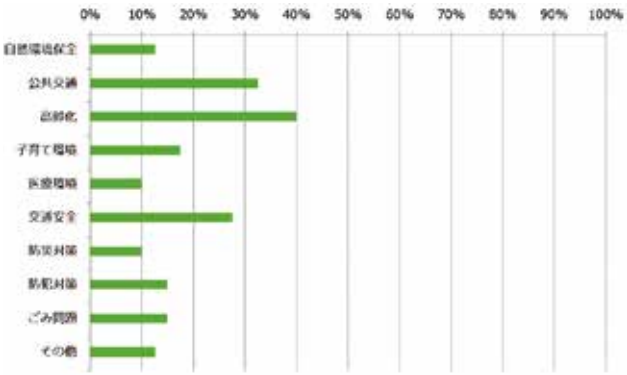

図９　来場者の居住地域の課題に関する興味・関心

３－３．質問紙調査結果

「愛川町が好きな人シンポジウム」の来場者に対し質問紙調査を図８に示した様子で実施した。得られた結果を以下に示す。

来場者の年代別割合は、「10 代（27.5%）」「20 代（7.5%）」「30 代（17.5%）」「40 代（15.0%）」「50 代（7.5%）」「60 代（15.0%）」「70 代（7.5%）」となっていった。

来場者の居住地域は、「愛川町内（90.0%）」「町外（10.0%）」であり、居住地域の課題に関する興味・関心は図９に示す通りとなっており、特に「高齢化（40.0%）」「公共交通（32.5%）」「交通安全（27.5%）」が高い割合となっていたが、半数を越える興味・感心項目は見られなかった。

来場者の自治会（町内会）加入状況は、「加入（67.5%）」「未加入（32.5%）」となっていた。

来場者の参加目的は、「愛川町が好きな人との交流（20.0%）」「出展内容の体験（35.0%）」「愛川町の好きなところを共有（25.0%）」「駄菓子掴み取りイベント（27.5%）」「くじ引き（37.5%）」となっていた。さらに、「愛川町が好きな人シンポジウム」をどのように知ったのかについては「家族･友人（40.0%）」「Facebook（20.0%）」「チラシ（25.0%）」「通りがかり（7.5%）」「出展者の店舗（10.0%）」「ポスター（5.0%）」「回覧板（2.5%）」となっていた。

来場者の 55.0% が「愛川町が好きな人シンポジウム」を通じて知った「店舗」「団体」に、後日、訪れたいまたは参加したいと思ったと回答していた。また、来場者の 32.5% が「様々な人に知らせたい」メッセージを自由記述欄に記載していた結果が得られた。

表４　出展者に対するインタビュー内容

回答者	インタビュー内容
出展者 愛川園芸	松ぼっくりガーランド作り大盛況でありがとうございました。「Facebook をみて、これをやりたくて来たのよ！」と言ってもらったり、お隣の相模原から足を運んでくださった方とお話できたり、美味しいお魚屋さんを教えてもらったりとガーランドを作りながらいろんな方とお話ができて楽しかったです。
出展者 春日台 タウンカフェ あい	たくさんの方がカフェにお越しくださり、ありがとうございました。97 杯のご利用を頂きました。また、カフェのランチを召し上がっていただき、嬉しいコメントをいただきました。来場者の方々と直接お話しできたこと、カフェを皆さんに知っていただけたこと、カフェカレンダーのイベントに興味を持っていただけたことなど、たくさんの収穫がありました。

３－４．インタビュー調査結果

次に「愛川町が好きな人シンポジウム」終了後 14 日～28 日以内に出展者から得られたインタビュー結果の一部を表４に示す。出展者の 75.0% は、「愛川町が好きな人シンポジウム」の参加者が後日「店舗を利用した」「交流した」との回答が得られた。

４．考察

４－１．考察の視点

本研究は「小規模な活動団体が自身の活動に多様な住民の参加を促進する知見とは何か？」との問いに対して神奈川県愛甲郡愛川町を事例に小規模な活動団体および地域住民の協働を加速させる場・仕組みとして「愛川町が好きな人シンポジウム」を開催した。来場者に対するアンケート調査及び出展者に対するインタビュー調査で得られた結果に基づいて実践の効果と課題を明らかにすることを試みた。前提として、出展者の大半は構成員数が少ない小規模な団体であったため、本研究目的を検証する対象として適していると判断した。以下、得られた成果について、「課題①小規模な活動団体を集めること」「課題②不特定多数の地域住民を集めること」「課題③集めた人々の交流を促すこと」「課題④交流がその後の活動に還元されること」の視点から効果を検証し、協働を加速させる要因と手法を考察する。

４－２．出展者及び来場者の「愛川町が好きな人シンポジウム」に対する認知と参加動機

第一に、「課題①小規模な活動団体を集めること」「課題②不特定多数の地域住民を集めること」については、「Facebook」「チラシ」「出展者の店舗」により参加意思が生じた住民が「家族・友人」に知らせる構造で主に成立していたことが想定され、「くじ引き」や「出展内容の体験」「交流や共有」といったコンテンツが参加動機に結びついていたと考えられる。

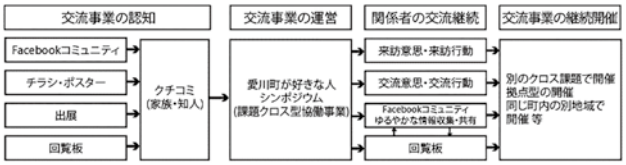

図９　シンポジウムを通じた交流の継続性

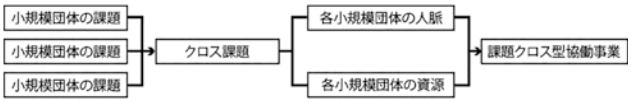

図 10　課題クロス型協働事業の創出

４－３.「愛川町が好きな人シンポジウム」の交流効果

第二に、「課題③集めた人々の交流を促すこと」については、「出展内容の体験」に加え、「愛川町が好きな人マップ」による来場者の好きな場所に関する意見抽出と共有の仕組みを実践した。「課題④交流がその後の活動に還元されること」については、実践により出展者及び来場者間に自然発生的に生じた対話や情報共有を通じて得られた効果に着目し、実践直後の効果として「店舗」に対する訪問意思や「団体」との交流意思が生じていたことが示唆されたほか、来場者以外の住民に対して認知を促す取り組みに対する意思に肯定的な影響を及ぼしていることを確認した。また、出展者側のインタビュー結果に基づくと、上記「訪問意思」や「交流意思」が「訪問行動」や「交流行動」に結びついていたと考えられる。

４－４．協働を加速させる要因

「愛川町が好きな人シンポジウム」における「交流の促進」が交流後に「協働の加速」に接続するためには、場の開催後に出展者や来場者間の交流が継続することが極めて重要な要因となる。図９「愛川町が好きな人シンポジウム」を通じた交流の継続性に関する概念図を示す。本研究における実践が定着するまでに想定されるプロセスとして「交流事業の認知」「交流事業の運営」「関係者の交流継続」「交流事業の継続開催」と４段階で協働の場づくりを支援することが想定される。特に、Facebook コミュニティ「愛川町が好きな人」は関係者の交流継続を「ゆるやか（利用者の要求に応じて情報収集・共有が可能）」に支援する SNS であり、既に多くの来場者が既存の仕組みとして利用していることから、参加や利用の敷居が低いことが想定される。ただし、来場者には「Facebook を使用していない・する予定のない来場者」も含まれるため、Facebook 内に蓄積された情報を回覧板化、冊子化する等の配慮も有効であると考えられる。

４－５．協働を加速させる手法と課題

本研究における実践を通じて得られた「協働を加速化させる手法」は、「課題クロス型協働事業の創出」（図 10）であると考える。具体的には、「活動分野が異なる個人・団体が抱える課題」を複数掛け合わせることにより、各団体の共通課題であり単体では取り組みの難易度が高い「クロス課題」を抽出し、その課題達成に寄与する事業を創出し協働で取り組む手法を指す。課題クロス型協働事業に取り組むことで、課題だけでなく、各個人･団体が有する人脈や資源が組み合わさり、課題達成の過程で連携体制が整い、かつ、単体の取り組みでは達成し難い問題解決に寄与するものと考えられる。

具体例を挙げると、本実践には「リサイクル」「障がい者福祉」「コミュニティ形成」の３分野における課題を抱えた出展者が見られた。各出展者は「ごみの減量化・資源化が進まない」「障がい者の雇用が安定的でない」「わかもの世代の地域離れが深刻化している」を挙げており、これらの課題を掛け合わせた結果「多様な人の巻き込み」に苦労している実態が「クロス課題」として抽出された。各団体は、「各分野に興味を持つ意識の高い層に対するアプローチは得意」な特徴を有するが、新しく異なる層に訴求する取り組みに苦労していた。そこで、上記３分野の各個人・団体がコアメンバーとなり、各分野の特徴や特色を記すのではなく、「愛川町が好きな人」「楽しさ」といった視点で多様な人を巻き込む「愛川町が好きな人シンポジウム」を課題クロス型協働事業として取り組む試みが進められ、コアメンバーを中心に様々な団体が出展者側の立場で関与し、お互いの人脈や資源を共有することで多様な人を集めることが可能になったと考えられる。多様な人が集まり交流を促すことができれば、様々なクロス課題が抽出され、新たな課題クロス型協働事業の創出に結びつくと考えられる。本来、「多様な人を集める」ことは各団体の目的を達成する「手段」に位置づけられる。比較的多様な人が集まりやすい都心部では上記構図でも活動が成立する可能性はあるものの、人口減少基調にある地域においては、「各個人・団体の取り組みや活動目標」のために「多様な人を集める」ことは困難な課題に位置づけられることが考えられる。本研究で得られた成果に基づくと、上記地域においては、「多様な人を集めること」を複数の小規模団体の共通目的とし、その手段として、「各個人･団体の取り組みや活動目標」を位置づけ、人脈や資源を共有しながら取り組みを実施することが「協働取組の加速」に寄与するものと考えられる。

引用文献

１）福本塁，中村和彦，山口紀生（2018），「防災を主題にした対話を通じた学習者の主体性の変化と学びの深まり－防災トランプを活用した事例を通じて－」，環境教育：27(3)，15-22. DOI: 10.5647/jsoee.27.3_15
２）Facebook グループ　愛川町が好きな人（2020）. https://www.facebook.com/groups/aikawatown/

補注

※１　愛川町が好きな人マップの制作過程は以下の URL にて確認可能である。https://www.youtube.com/watch?v=CReWj8ZjfC4

謝辞

本研究は「平成 29 年度地域活性化に向けた協働取組の加速化事業：障がい者の雇用を創出し、世代や立場をこえて地域のリサイクル資源を学び、集め、使う、資源循環型まちづくり推進事業モデルの構築（代表：前田隆之）」の支援を受けて実施した。参加関係者の方々にはこの場を借りて謝意を記す。